

荘島小学校創立150周年記念誌

大いちょう



久留米市立荘島小学校
〒830-0042 福岡県久留米市荘島町19-4



150周年記念日に寄せて

荘島小学校開校150周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

荘島小学校の児童の皆さん、本日は皆さんとともにこの歴史の1ページをお祝いできることを大変嬉しく思います。

荘島小学校の皆さんは、いつも元気なあいさつで迎えてくれて、素直で思いやりの気持ちを持って接してくれます。そして学習はもちろん、普段の生活においても、好奇心と向上心を持ち続けながら成長していることを感じます。

皆さんが今このように、当たり前のようにあいさつができることも、思いやりの気持ちを持って接することも、荘島小学校で学んできた卒業生や、多くの先生方、また地域住民の皆様からの良き伝統が引き継がれてきているからこそだと思います。

これからも向上心を持ち続け、皆さんを支えてくれる方への思いやりと感謝の気持ちを忘れず、これから先に続くたくさんの人たちに継承して行ってください。

この先も荘島小学校が、子どもたちの土台となるよう学校運営に協力して参る所存ですので地域や保護者の皆様方には一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。(令和4年11月28日)

PTA会長 内野陽介

創立150周年を迎えて

明治5年学制発布後、近代日本の幕開けと共に発足し、発展の歩みを継続してきた私たちの学校「荘島小学校」が、本年めでたく150周年を迎えました。本当に嬉しいことです。

本校は、明治5年「第二番荘島小学校」と命名され、大塚処平校長によって授業が開始されました。その後、明治15年に「荘島小学」、昭和22年に「荘島小学校」と改称され今日に至っています。その間、地域の方々、PTAならびに教育委員会をはじめとする関係機関の献身的なご協力と歴代の校長・教職員の熱意ある指導によって、伝統と実績を誇ってきました。

学校の宝の1つとして「卒業名簿」(一部不明)があります。この名簿から開校当初児童数119名が昭和になると1,200名を超える程に増えた等、本校の変遷を伺い知ることができます。また、青木繁氏、石橋正二郎氏、豊田勝秋氏等、多くの偉人を輩出してきています。これからも本校の歴史や伝統は、学校の宝として大切に次世代へ引き継がれていくことと思います。

さて、この150年の間に学校を取り巻くすべての環境が、開校当時にはおそらく想像もできなかったであろうほど大きく変容しました。人々のものの見方や考え方も大きく変わり、学校教育においても様々な教育改革がなされてきました。しかし、「子どもを中心とする教育」は不変のこととして継続されてきたと確信しているところです。今後も、長い荘島小学校の歩みの中で大切にされてきた「げんきに学んで正しく進む」という学校の伝統をさらに継承していきたいと思えます。

創立150周年を機に、次の50年、100年に踏み出すために、教職員一同力を合わせ、荘島をますます素晴らしい学校にしていきます。

どうぞよろしく願いいたします。

久留米市立荘島小学校校長 今津弘樹

荘島校校歌
丸山 豊 作詞
團伊玖磨 作曲

一、高良の山なみ 朝日にはえて
風は緑だ 久留米の町の
われらが荘島 たたえよ荘島
元気に学んで 正しく進む
われらのひとみを 光よてらせ

二、筑後の流れは ゆたかにめぐり
風は緑だ 久留米の町の
われらが荘島 たたえよ荘島
元気に学んで 正しく進む
われらの足音 平野にひびけ

三、未来を背負うて 希望に燃えて
風は緑だ 久留米の町の
われらが荘島 たたえよ荘島
元気に学んで 正しく進む
われらの覚悟は 今こそかたい

目次

- 荘島校校歌.....1
- ごあいさつ.....2
- 祝150周年荘島小2022(人文字).....3・4
- 歴史編.....5~12
創立期 6 明治期 7 大正期 8 昭和期(戦前) 9
昭和期(戦後) 10 平成~令和期 11・12
- げんきに学んで正しくすすむ。
~多様な学習活動のひとコマ~.....13
- ぶらぶら歩いて、さがそう「荘島」.....14~18
荘島町 15・16 中央町 17 白山町 17
本町 18 松ヶ枝町 18
- 荘島人(しょうじまびと).....19~22
青木 繁 20 豊田勝秋 21 石橋正二郎 22
- 荘島小学校創立150周年記念事業.....23・24
- 荘島小学校のあゆみ(年表).....25・26

久留米市街を流れる筑後川と耳納連山。中央に見えるのが高良山

荘島小学校150周年おめでとう。

よく晴れた秋の日、荘島小学校の子どもたちと、
たくさんの地域の方々が校庭に集まりました。
ずっと昔から、子どもたちの成長と地域の歴史を見守っている大いちょう。
そのそばで、みんな笑顔で青空を見上げました。
この先10年、20年…いや、ず～っといつまでも、
みんなの笑顔が続きますように。
その笑顔の舞台として、荘島小学校も輝き続けます。



歴史編

ちくご 筑後地方の小学校の中で最も古い歴史を持つ
「荘島小」の150年を振り返る



久留米城下町図(天保図)〈部分〉
久留米市教育委員会所蔵

そりつき 【創立期】

それは近代国家・
日本の夜明けとともに始まった

約270年間続いた江戸時代が幕を降ろし、明治時代が始まったのは1868年。久留米でも、それまでの有馬藩の統治が終わって明治4年7月に久留米県が置かれ、さらに同年11月に筑後全域が三瀧県となりました。

この頃までの教育は、明治の初めで筑後地方に87あった寺子屋が中心でした。明治5(1872)年8月に、国民は皆等しく教育を受けろべきという「学制」が発表されました。近代的な教育制度の始まりです。この年に設立された三瀧県内の小学校は3校だけ。11月2日に藩校だった第1番明善小学(男子)、采はん小学(女子)が開校、そして11月28日に第二番荘島小学が開かれたのです。

明治5年は、学制発布のほか、郵便制度の確立、鉄道開通など、日本が近代国家として機能しはじめた年です。太陰暦(旧暦)が太陽暦に切り替わったのは、まさに荘島小学誕生の直後でした。明治5年12月3日を明治6年1月1日と改めたのです。日本の近代国家としての夜明けとともに誕生した荘島小学校。その歴史をたどってみましょう。



ひろしげ『東都名所芝赤羽根増上寺』。赤羽橋界限を描いた歌川広重の絵。右手が久留米藩有馬上屋敷・水天宮。
出典：国立国会図書館「錦絵でたのしむ江戸の名所」



明治初期の久留米城。250年続いた本丸の最後の姿。明治8年に建物は解体されました。荘島小学ができた当時はまだ見ることができました。



当時の児童たち(明治33年卒業生)



明治7年の卒業証書。当時は4年制で8級から始まり、半年ごとに各級の卒業試験がありました。試験はかなりむずかしく合格率は10~35%でした。この証書は8級と7級を同時にもらって2級進級したことを示しています。

どうして「荘島小」が残った?
県内屈指の就学率、そして土地柄

荘島小学が開校した後、日本中にたくさん小学校ができましたが、統廃合によってその多くは消えていきました。ではなぜ、荘島小学校が残ったのでしょうか。

荘島小学と同じ頃設立された明善小学は教員を養成する学校としての役割が大きくなり、明治8年に明善、采はん両小学ともに廃止されました。

明治10年当時、福岡県全体の就学率は33.6%でしたが、久留米は65%と県下で最も高い就学率でした。特に荘島地区は、さらに就学率が高かったと思われます。荘島町はもともと久留米藩の下級武士の屋敷町で、多くの優れた学者を輩出してきた土地柄だったのです。

しかし廃藩置県で武士は職を失いました。そうした中、人々は将来への活路を求め必死に勉学に励んだのです。荘島小学校は、こうした向学心の高さや、敷地が公有であったこと、その敷地が拡張できたことなどが、他に消えていく小学校が多い中で存続してきた理由と考えられます。

明治時代の庄島町
小学校の敷地は、昔は牢屋だった？

江戸時代の庄島小路が明治6年に17町に整理され、同9年に庄島町となりました。同22年に久留米市が誕生し、久留米市庄島町となりました。町名の由来は洪水の時に浸水せずに島となること。庄島とは「住み家のある島」の意味です。旧丁(町)名には西堅丁、東堅丁、石橋丁、葛堀丁、昇丁、牢屋丁、大工丁などがありました。昇丁・枕丁など一部の丁名は戦後もしばらくは使われていました。青木繁旧居は枕丁にあります。

庄島小学は最初、御旗丁と葛堀丁に挟まれた所に誕生しました。庄島の町内には江戸時代から続く牢屋があり、明治20年まで「福岡県久留米監獄支署」として存続しました。その後、明治40年に庄島小学校がこの牢屋跡地まで敷地を広げ、後に北は牢屋丁まで、東は藪ノ丁まで拡張しました。

学校は、入学時の児童の年齢はまちまちでした。中には19歳の人もいたようです。進級試験がかなりむずかしいことや、授業料が有料で経済的な負担が大きかったことから、明治14年の時点で3年以上在籍していたのはおよそ4人に1人という状況でした。

明治時代の後期、庄島の町にはのちに日本や世界中にまでその名を轟かせる程の大きな会社と工場がいくつも誕生しました。庄島は活気にあふれた町でした。

◆**国武特許餅工場**
明治39年、国武金太郎が現在の西鉄バス京町支社(縄手バス停)付近に設立。この一帯を「国武丁」といいました。久留米餅を全国に広めた立役者です。

◆**つちやたび白山工場**
米屋町(現中央町=あきない通り)に店を構えていた「つちやたび」が明治41年、白山町に蒸気機関を利用した近代的な工場を建設しました。現在のムーンスター。

◆**志まやたび本店**
場所は芋抜川町1丁目(現在の本町1丁目)。明治40年仕立物屋から足袋専門となり、明治41年庄島町に新工場を増設。後のアサヒシューズ、ブリヂストン。



江戸期の久留米の地図。およそ①の区画が今の庄島地区。周りは田や畑で、庄島の名の由来が「住み家のある島」であることがよくわかる。



明治10年代の福岡県久留米監獄支署



国武特許餅工場 ※内部風景は個人蔵



つちやたび白山工場(株)ムーンスター所蔵



つちやたび白山工場(株)ムーンスター所蔵



志まやたび本店(株)ブリヂストン所蔵

大正時代、
庄島小はマンモス学校に

明治27年に原古賀尋常小学校と合併します。久留米市の中心部だった校区内には人が増え続け、大正に入ると児童数が1,200人ほどに膨れ上がりました。校舎が狭かったため、学年ごとに分かれて元工業学校や女子高等小学校、幼稚園などの分教場で授業が行われました。大正4年によく2階建ての新校舎が建てられ、全校児童が一カ所で学べるようになりました。

大正時代の終わりである14年ごろには児童数も1,500人に届くほどになり、クラスも27学級になっていました。今の基準でも大きすぎるほどのマンモス校です。そこで大正15年に原古賀学区、小頭学区を庄島校から分離し、金丸校が設立されて2学年以下を金丸校へ移しました。高学年の児童はそのまま庄島校へ通っていました。

◆**日本製粉(現ニッポン)久留米工場**

大正3年、現在のエバーライフネアシティの場所に建設。久留米初の鉄筋コンクリートビル(6階建て)で、国鉄の引込線もありました。昭和60年、福岡工場建設に伴い閉鎖。



明治通りには明治38年から昭和4年まで筑後馬車鉄道(のちの筑後軌道)が走り、初めは石油発動機車、のちに電車が走っていました。この写真は明治11年。

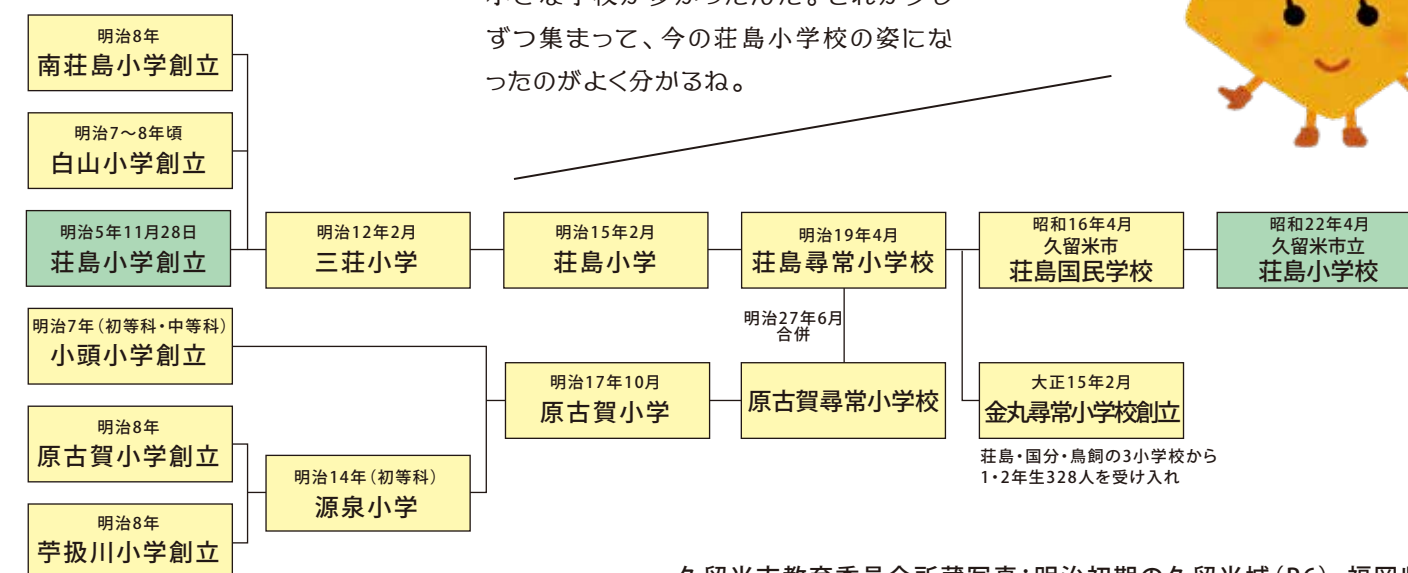


大正4年完成の校舎玄関



日本製粉久留米工場 大正3年完成当時。提供(株)ニッポン

◆**庄島小学校の移り変わり**



小学校の制度が始まった頃は、とっても小さな学校が多かったんだ。それが少しずつ集まって、今の庄島小学校の姿になったのがよく分かるね。



久留米市教育委員会所蔵写真: 明治初期の久留米城(P6)、福岡県久留米監獄支所(P7)、国武特許餅工場外観(P7)、筑後軌道(P8)、焼野原になった市街地(P9)、昭和28年の水害(P10)

【昭和期(戦前)】

近づく戦火に
にぎやかな市街地に

大正から昭和初期にかけて、荘島にはたくさんさんの工場が集まるとともに商店や飲食店も立ち並び、明治通りに肩を並べる繁華街が形作られました。現在の通町スシロー前から紳士服のフタタを通して三本松公園、旧みずほ銀行久留米支店の東側につながる通りです。

一方、昭和6年の満州事変をきっかけに、陸軍の施設が集中していた久留米の町でも、人々の暮らしの中に戦争の足音が近づいてきました。

昭和11年には御真影(天皇・皇后両陛下の写真)や教育勅語が納められた「奉安殿」が建設され、児童たちは最敬礼して前を通っていました。昭和16年に太平洋戦争が始まると、国民学校令により久留米市荘島国民学校と改称。講堂では婦人会が軍需品の縫製を行っていたほか、小学生も防空壕を掘ったり、イモやカボチャを植えるような重労働をこなしました。



戦時中は講堂内で婦人会による軍需品の縫製が行われていました。



昭和11年に完成した奉安殿。天皇陛下の写真がこの中に納められていました。



一面焼野原になった市街地。第一銀行(旧みずほ銀行久留米支店)より荘島町方面を望む。昭和20年8月。



大正時代から荘島小学校は少年野球の名門校として名声を博しており、昭和に入ってから久留米市内の少年野球大会で、たびたび優勝しました。写真は昭和11年、年間24本の優勝旗を獲得した時のもの。



昭和2年に改築した南校舎(中央)東半分と昭和3年に落成した講堂(右)まだ若かったイチヨウの木(右から2本目)。

戦争による空襲で
久留米の町は、焼け野原に

昭和20年8月11日の午前10時20分ごろからおよそ20分間、沖繩から襲った米軍機約150機が焼夷弾を投下しました。久留米空襲です。この空襲によって、久留米市の3分の2に当たる面積が焼き尽くされました。攻撃目標の中心点は、明治通りのセブンイレブンがある「荘島小学校前」交差点のところでした。まさに小学校の目と鼻の先です。幸い荘島小学校は当時の先生方の献身的な努力によって焼失を免れました。ですが、212人(荘島校区では65人)の人が亡くなり、4,506戸、約2万人が被災しました。荘島校区は、金丸校区に次ぐ大きな被害を出したのです。この4日後に終戦を迎えました。

毎年、空襲があった日に小頭町公園で慰霊式が開かれています。式に、まだ小さかった弟さんを空襲で亡くされたお年寄りが参列されていました。弟さんは一度は防空壕に避難しましたが、「忘れ物をした」と自宅に戻った時、火災に巻き込まれてしまったそうです。今からほんの77年前のこと。決して忘れてはならない出来事です。

【昭和期(戦後)】

設備が近代化
水害を乗り越え、

昭和28年、西日本一帯は大水害に見舞われ、久留米市も大きな被害を受けました。周りと比べて高い場所にある荘島小学校は、白山町など校区内の浸水地域からだけでなく、校区外からの避難場所としても使われました。また市役所の水害対策本部としても活用されたそうです。しかし、当時の木造校舎は老朽化が激しく、水害で傷みがひどくなったことから、翌29年には市内で最初の鉄筋コンクリート3階建ての校舎(6教室)が建てられました。

このころ、筑後川では日本住血吸虫による風土病・通称「ジストマ」が流行し、泳ぐことが禁止されていました。そこで学校と校区が一体となってプール建設の陳情を行いました。1年半の間陳情を繰り返して、ようやく昭和29年にプールが竣工しました。その後、市内の他の小中学校にはブリヂストンの石橋正二郎氏によってプールが寄贈されています。30年には丸山豊氏作詞・團伊玖磨氏作曲という「巨匠」2人が手がけた校歌が完成しました。

昭和34年には鉄筋コンクリート3階建て9教室が増築され、さらに老朽化していた旧講堂に替わって、これも石橋正二郎氏より寄贈された石橋記念講堂が落成しました。



昭和38年に発行が開始された文集「いちよう」。現在も児童の作文の掲載が続いている。



筑後地区器楽祭連続出場35回の表彰状



図書活動優秀実践校文部科学大臣賞の表彰状

旧講堂の跡地には、昭和41年に学習園が開園しています。福岡県の地形をかたどった庭園で、庭園の権威である奈良国立文化財研究所の森蘊博士の設計で作られました。同年から翌42にかけては、特別教室(図書室、音楽室、図工室、給食室など)が完成し、荘島小学校は久留米で最先端の施設を備えた小学校に生まれ変わったのです。



昭和28年の水害で倒壊した白山町の家屋



昭和34年完成の鉄筋コンクリートの校舎と石橋記念講堂

ソフトが充実
児童数減少の一方、

児童数は昭和36年に1,000人の大台を割り込み、これ以降、ほぼ右肩下がり状態になりました。高度経済成長の進展とともに人口のドーナツ化が進み、市街地の学校はどれも同じような状況でした。その半面、新しく住宅地が広がった郊外の学校はマンモス化が進みます。

施設の近代化が進んだ荘島小学校は、今度はソフトの充実期を迎えます。昭和38年には、現在も続いている文集「いちよう」の第1号が発行されました。これから昭和40年代にかけて、教科外の活動である特別教育活動の研究校として研究実績が各方面で紹介され、全国的にも知られていました。音楽教育や図書教育、「良い歯の学校」などの表彰がその歴史を物語っています。

学校全体が現在の姿に、
おなじみの学校行事も

昭和56年に、最後に残っていた木造校舎（2階建て）が建て替えられ、2つの普通教室や保健室、特別教室（家庭科室、理科室）などが完成しました。平成2年には古くなった石橋記念講堂に代わって体育館（屋内運動場）が建てられ、同じ建物に昇降口と視聴覚室を新設、同6年には新しいプールがオープンし、現在（令和5年）と同じ学校の姿が出来上がっています。同13年には学童保育所が開所しました。

ソフト面では、平成3年に福岡県から国際理解教育実践協力校の指定を受けました。同8年にバレーボールのアジアカップ大会に参加した選手が、翌9年にはマケドニアの国立舞踊団が学校を訪問するなどの国際交流が図られました。今でも昇降口には世界の国旗などの掲示物が残っており、当時の面影を伝えています。平成10年には保護者が中心となって本の読み聞かせ活動がスタート。同13年には、地域のシンボルである校庭の「大いちょう」をライトアップして学校の伝統や良さを見つめ直す「大いちょうフェスタ」が始まりました。以前からあった「荘愛セール」とともに、地域の行事として定着しています。



荘島校区の街並み



平成10年から開催されている大いちょうフェスタ



▲平成9年にマケドニア国立舞踊団が荘島小学校を訪問し、舞踊を披露しました。



▶ 荘島校区
コミュニティセンター



体育館



学童保育所

存在感が増す小学校
地域の中で

平成に入ってから、全国的に地域と学校との「つながり」が一つのキーワードになりました。

荘島校区も例外ではありません。特に昔からの住宅地が大半を占める荘島校区は、分譲タイプの大型マンションはそれほど多くありません。一方で、住む人の入れ替わりが激しい賃貸型のマンションやアパートはたくさん建設されるようになりました。以前から住む人たちと、新しい住民の地域に対する思いの差や住民同士の交流は、地域の課題だと言われています。その中で、たくさんの人たちが関係する小学校の存在がクローズアップされるようになったのです。久留米市が小学校区単位を基礎とするコミュニティの核として、校区公民館に代わってコミュニティセンターを整備したのは、その証でしょう。

こうした流れの中で、学校の運営に地域の人たちが参加する仕組み「地域学校協議会」ができるなど、地域の中で小学校が占める存在は大きくなっています。

小学校の姿
変わり続ける教育、

平成14年に始まった「総合的な学習の時間」に加え、令和になってからはICT教育の進展で各児童にタブレットが配布されるようになり、英語の教科化やプログラミング学習などが始まりました。すでにほとんどのトイレが洋式化され、教室にエアコンが設置されています。色々な意味で、教育の現場では日進月歩の変化が続いています。

地域に目を向けると、幅が狭くて歩行者も自動車も通りにくかったJRの白山ガードは長年の要望活動の結果、平成26年に改良され、以前と比べてずいぶん通りやすくなりました。通学路がより安全になったので、地域と学校が一体となった運動の成果の一つと言えるでしょう。



ICT教育の一環として、パソコンを使って行なわれる授業。

「ウィズコロナ」
「アフターコロナ」に向けて

そんな中、令和2年に入ってから始まった新型コロナウイルス感染症の大流行は、荘島小学校に取っても大きな試練となりました。

対面で直接コミュニケーションを取ることが難しく、大人数が集まるのが制限されました。その結果、たくさんの学校行事が中止や縮小に追い込まれ、子どもたちは思い出を作ることすらままならない期間が続きました。先生方や保護者のみなさんの負担、苦労も大きくなりました。

それでも創立150周年を迎えた令和4年には「水の祭典」のマーチングパレードなど多くの学校行事が復活。「ウィズコロナ」から「アフターコロナ」を模索する動きが続いています。

荘島小学校が創立100周年を迎えた50年前（つまり昭和50年前後）、誰も現在の教育や小学校の姿を想像できなかったでしょう。同じように200周年となる50年後、いや



おとなになった後に、実生活で活かせる力を養う「総合的な学習の時間」。



平成に入ると、猛暑となる年が急増するようになり、教室にエアコンが設置されました。



平成26年に改良されたJRの白山ガード

10年後の姿すら簡単に思い描くことはできません。ですが、学校と地域との絆は消えることはありません。これからも地域のシンボルとして、ここに住む人たちの心のより所として、ずっと荘島小学校が存在し続けることを願わずにいられません。



令和2年から猛威を振るった新型コロナウイルス感染症の対策のため校内に消毒液が設置されました。